

九六位山関係史料

(一)

後藤 重巳
山中 浩司

解題

大野川の南岸、行政的には今日の大分市広内地区に所在する九六位山は、かつては靈仙寺と並ぶ山岳信仰の拠点であった。

鶴峯戊申の著になる『臼杵小鑑拾遺』によれば

海部郡佐井にあり。此山、古へは黒越山と言しなるべし。往昔、九六位山円通寺と号し、豊後五山の一なりき。相伝ふ、人皇三十三代崇峻天皇四年の建立なり。

此山靈異人みなしれる所也。山中に太郎坊谷、次郎坊谷あり。古昔、坊中の跡なり。又堂の午未の方に鐘楼山あり。むかし此山に鐘桜あり。其鐘又靈作のものにて、龍宮王これを請けてやまず。よって山下の淵にお

とし入る。今、鐘が淵といふは此故なり。堂の前に四尋四尺の銀杏樹あり。是を海部、大分の境とす。と見えている。

所収の「九六位山円通寺縁起」なるものによれば、当山の開基は、百済国より渡来帰化の僧たる日羅が、崇峻天皇四年に、後代の豊後国古国府所在の円寿寺を開山すると同時に始まると言う。

この伝承はともあれ、大野川河口部南岸にそびえ立つ九六位山は、豊後国府に近い靈山として民衆に篤く信仰される高山であった。

所収の史料の(一)は「九六位山由緒書」なるもので、ペ

ンによる筆写であり、原本はすべて失なわれている。

(円通寺所蔵)

史料(二)は「天台宗修験世系譜」と題され、九六位山円通寺に係わる、各院房の院主系譜が全覽されるものである。

(一)資料は、部分的に解説不明ヶ所が多く、その部分は
[]で示した。

昨五十二年度の史学科の年間研究課題として、九六位山周辺の社会民俗調査を計画したが、諸般の事情から、二度の探訪のみに終った。右以下二点の史料は、この探訪によって得た数少ない史料である。

尚、史料の解説は、主として山中浩司が担当した。

(後藤・山中)

(一) 九六位山由緒書

一 当山之儀日羅聖人開基已來繁榮仕候事歳久御座候薩州
逆乱之節仏閣悉敵崩仕荒野罷成候所中興成就院其砌野
津倉園村に居申候得は多福寺雪窓和尚被仰候は九六位
山再興仕候様にと御座候 付寛永十九年^午移居仕竹
木植立田畑打開申候 [] 興成就院 [] 江戸觀
音堂建立 [] 候其節御老中御三人様之御判
頂戴仕置候依之寛文二年觀音堂建立仕候段々山林竹木
榮申候故同五巳年竹山御檢地被成御入御運上地と罷成
申候其節雪窓和尚被仰達為堂修覆御免許山に被為成下
右御三人様より右成就院へ直に被仰付候趣其方植立竹
木未々為觀音修覆御免許山 被成下右之檢地帳被下候
間末代の証文ニ仕候様ニ被仰渡候其御帳面干今頂戴仕
置申候 私方中興成就院量海二世成就院量辺三世真修
院量覺四世大学院量盛五世成就院玄海六世親成院私迄
に七代に罷成申候扱又山内僧俗由緒左之通に御座候
一 普門院祖父宝城院は二世成就院にて始は有智山蓮乘寺
へ弟子ニ遣置候へ共居届不申罷帰申候其後横尾岩松八
幡之住職に仕置候処養父泉龍院と不和に罷在不埒の義
仕出し欠落仕候間御達申上消帳に致置候其後当山へ立
帰申候ニ付右成就院御役所へ申上候得は御足輕衆被成
御遣追放に被仰付候前後共に三拾年程流浪仕居申候処

及老衰難義仕由に付真修院御歎申上候得は願の通帰山
被仰付候即真修院家内に立帰申候

[] 先祖中興成就院下男俗名平次と申候 [] 相
勤候ニ付取立弟子に仕中浄と名附申候 [] 成就院隨
身仕居申候中浄男子四人之内三人は成就院下男に召遣

一人ハ弟子ニ仕三力と名附申候此三力二世成就院入峰
之節剛力に召連八峰為仕候右之節院号御免許奉願円実

院と相改申候其子先蓮乘院只今之 [] 院迄三代に罷
成申候

[] 山伏三人之者共正徳六年ニ真修院御願申上 []
ニ為仕置申候

「」右衛門先祖久助と申者野津倉園村之「」御座
候所先師成就院当山中興仕田畑打開申候間右久助地作

に雇置申候処永住相望候に付屋敷田畑等遣し別判に為
仕置候久助子亦四郎其子助七新内と申して兩人御座候

助七子金石右衛門相果後継無御座候間重助親甚右衛門へ
跡敷為仕置申候

一新内義正徳五年ニ新判願仕別宅ニ罷成申し候新内子共
五六人も御座候へ共不殘相果無程新内数右衛門に「」

判為仕置申候 「」平先祖平兵衛と申者敷戸村之者
にて御座候処右成就院雇置申候へは永住相望候ニ付

「」田畑等遣し別判に為仕置申候平兵衛子平内其子

只今之文太にて御座候

一、吉兵衛義享保年中より別判ニ罷成申候其子藤助藤兵衛
兩人にて御座候処藤兵衛跡判仕其子只今之直平にて御
座候

一、藤助義幼生の時分御城下に質置に仕申候所不所存に候
て居届不申候其後森町甚作と申者之養子に遺置申候得
共親子不和に罷成居住不仕当山に罷帰申候其節山内竹
木「一」依何事差支に相成申間敷段為致証文親吉兵衛
家内に談込申候夫より以来觀音山にて下枯薪等相渡不
申候此者去春之時分別判に相成申候

右俗家之者先祖別判相立候節子孫末々に至迄觀音修覆
迄当山役等之人歩仕諸事指 請候筈に相究候上田畑屋
敷相渡觀音山にて普請竹木下枯薪等相渡候方に相極置
申候其後代々人歩為致普請竹木相渡申候

一、貞享三年^寅年山内平兵衛と申者父子にて右成就院事所々
にて悪敷申立其上指回相背候 二 付後藤半右衛門殿寺社
奉行之節右之訳申上候得は其方指図相背候者其方心
に可仕旨被仰付候右に付田畑屋敷取立 当山を立退候
様に申付候へは毛井村御庄屋を頼組内弁指衆打寄重々
詫事有之候に付屋敷田畑前之通に遺置候其節指図等末
々迄毛頭相背申間敷との証文取置申候

一、元文四年祖父成就院代十六天神蓮法院法頭之節山内之

者共心儘に山林伐荒候に付御達申上候処蓮法院御吟味
被成山林大切に仕候様に被仰聞候証文為致内濟仕候右
之証文大宝贝方へ差出置申候

一、觀音山開畑之義先年享保年中觀音為祠堂起「一」畑に
仕作初穂は奉納仕山内之者に為作置申候「一」程荒地
に罷成候故松木杉木其外雜木植立置申候或者処々に
寄候ては草野にも仕置申候「一」明和年中山内之者共
畑鮮候間為作被下候様にと相望候に付為打起先年之通
作初穂奉納為仕置申候然に近年蓮乘院新応院藤助心儘
に打弘候間毎々打弘不申候様に申聞候へ共承知不仕候
且又数右衛門義觀音荒地一ヶ所打起候故毎々申聞候へ
共作初穂奉納不仕候扱又藤助も去巳年より一向奉納不
仕候其外山林所々にて伐取伐荒申候得は觀音相立不申
候只今之通に御座候ては觀音追て亡所に可罷成と奉存
候乍惶觀音相立候様に偏に奉願候以上

「一」月

九六位山

成就山

大宝贝

貞享三年平兵衛証文之写

元文四年山内連判証文之写

夫九六位山円通寺者昔日

日羅上人之開基仏閣寺社繁栄スル年久シ然ル処ニ薩州

より兵革以来六十年荒野と成居候所を先師成就院と多福

善師と一味して寛永十九年壬午年正月二十一日に初て来

て之に住居す無程も山林竹木盛長「申達得は身骨

をくたき荒所を取立「して山林竹木一山中不残觀

音へ被為進置「成就院代になり寛文乙巳年竹山御檢

地有之御公儀へ被召上候所に雪窓和尚以来段々首尾有之

候事明白之山にて候故前々之通に御赦免為成被下其時之

御奉行之御判有之御檢地帳御歸し被下当寺之為注物致所

持置候其後景通公之御代に成り山方に色々障り有之候得

共御檢地帳御座候故度々埒明申候右之条々委細の儀別紙

に有之

甲 第三号 証

口上之覚

一、九六位山之儀は往古より「て御座候得共中古より

坊守もなく亡所の様に罷成居申所を雪窓和尚多福寺へ

御住職之節私先師成就院儀其砌「居住仕居候所雪

窓和尚より被仰九六位山へ「取立申様にと御座候

て寛永十九年「竹木を植立田畠をひらき申候て

其後曾「觀音坊於江戸に当寺觀音堂を建立仕度由

に付材木拝領仕度旨御願申上候所に願之通り材木拝領

被仰付其以後入目雜用之銀子等差下し寛文二年觀音

堂建立仕候て其より段々山林竹木等さらへ申故同五巳

年御公儀より山林御檢地御入被遊御運上と罷成申候ニ

付雪窓和尚より先主能登守様江直に被仰達觀音堂為修

覆御免許山に被為成下候御老中稲葉凶書様渡辺主殿様

山田縫殿様御三人「拙僧親成就院へ直に被為仰渡

候趣九六位山へ其方植立候竹木末々觀音堂為修覆御免

許山被成「候帳面差歸し末代の証文に仕候様

にと被仰渡候其御帳干今頂戴仕置候事

寛

一、寛永九壬申年黒越山古跡中興仕候事

享保九辰十月九日申上候事

一、寛永十九壬午正月二十一日中興成就院移住居

中興成就院代

一、其後山林竹木出来申候段山御奉行三重野諸左衛門殿

御老中様江其趣被仰達候其節多福寺

和尚様被仰候て一山御免山被仰付候事

二世成就院代

一、寛文二壬寅三月観音堂建立成就仕事

二世成就院代

一、寛文五巳年三月御領分中竹山御検地之節黒越山竹山御

検地御入被成候事其節又多福寺和尚様より被仰達以前

之通竹木共に御免被仰付候其節御検地帳被下置

候事竹山之外略文御究不被下其得分往古之通八

町四方竹木植立御座候由申候事

二世成就院代

一、寛文年鐘造立仕多福寺賢岩禪師様銘文御作被遊

候事

二世成就院代

一、延宝二寅年より右御免山之内是迄段々細打開其外田新

地等打開作徳相応に御座候由にて二世成就院御願申上

御年貢上納仕候帳面御座候事

二世成就院代

一、元禄年中成就院不勝手に罷有候節右御年貢拾俵之内、

四俵つつ拾年程御免被下候事

二世成就院代

一、貞享二丑年山内平兵衛心儘仕候節寺社御奉行様申上候

へは其方下知に相背候へは其方了見次第可仕候様に

て被仰付に付屋敷田畑取揚山内を立退候様申付候へは

毛井庄屋并指相頼詔言仕証文差出候事

三世真修院代

一、宝永六丑三月御料松岡村より次郎坊谷高鼻東谷西東平

之山林伐取候事

三世真修院代

一、宝永七寅五月十八日

御上使様御通被遊候節右観音山松岡村より伐

荒申候段御歎書付差上候事

右書付被遊御請取即刻御意宜申付遣と被

仰聞候事申伝

真修院代

一、正徳六年下山伏三人別判罷成

同人代

一、享保元申年山内違乱之義法頭大宝院へ書付差出

五世成就院代

覽

一、元文三年十二月山内円実院より書付一通本坊へ差出候事

一、元文四年二月山内違乱之義申上其節山内之者より証文本坊に差出候事

五世成就院代

一、宝曆「」年山内違乱之趣申上

「」代

一、明和四年六月和談願書差上願之通被仰付候て一山中和談仕候事

親成就院代

一、同年九月一山条式相認観音堂に掛置候事

一、天明六年正月より山内違乱之義申上同七年三月迄被仰付候段々訊御座候事

一、先年宝曆年中数右衛門藤兵衛蓮乘院宝城院来宝院右五人

人之者我儘仕山林過半伐荒諸事古例相背候に付無抛御歎申上候所右之者共段々託事仕候て古格之通相守後

来違変仕間敷旨申に付和談「」差上内済に仕候其砌從御奉行所蒙仰川口「」指図往古より仕来之通条式

相認候其節山内之「」寺社御役所江被召出条式之通無違変相守候様被仰渡候右条式観音堂に掛置申候然に

近年其条式相背山林猥に伐取山役人歩等私指図之通に不仕候扱又談合之儀御座候節相招候ても数右衛門始其

外不參之者御座候故申談も相成不申候且又參候者に申談仕候ても談合不申皆々諸事心儘に仕居申候所当春よ

り諸事指図請不申山役人歩一向不仕候但し重助一人古格之通相心得罷有候尤近年指図之通に不仕候段左之通

に御被候

「」より観音修覆造営之節山内之者に竹木伐出為致四分方観音江奉納仕六分方飯代に遣来候付「」

月七日山内不残呼寄観音普請之借錢「」候間竹伐出候様に申聞候得共伐出不仕候「」去巳八月松木伐出

候様に申聞候得共一向請合不申何分伐出不仕候得は借

錢相増迷惑仕候

一、去^巳秋諸方往来道造候様に申聞候得共作不申候

一、同^巳十一月鐘堂葺替候様に申聞候処数右衛門義指図請候に不及と申由に付山内皆々私指図之通不仕候故去冬葺替出来不仕候猶又当年も干今葺替不仕候折節夏以来

之長雨桁梁等に漏掛痛出来仕迷惑に承存候

一、「」より相勤来候祭祀相勤不申候

一、「」所觀音山藤助と申者打起畑に仕明和二年「」

觀音江作初穂奉納仕居申候所去^巳年「」納不仕候

同所近年段々打弘申に付毎々差上「」不申候様に申聞候へ共承知不仕候

一、迫之谷と申処觀音山数右衛門打起畑に仕候間先年享保年中之通作初穂奉納致候様に申聞候へ共承知不仕候

一、同所蓮乘院亡父蓮乘院打起畑に仕明和二年より作初穂奉納仕候是又近年段々打弘申に付打弘不申様に申聞候得共承知不仕候

一、ふるから山はなぞの山三ヶ所新応院亡父来宝院打起明

「」より作初穂觀音江奉納仕候是又近年段々打弘申に付打弘不申候様に申聞候得共承知不仕候

一、「」地畑之畔觀音山年々伐取跡打起し畑に取「」

ヶ所御座候其外觀音堂風除木之枝葉伐「」申候此儀高山の事に御座候得は先年より大切に「」置候所猥りに伐仏伐取候得は至て迷惑に奉存候

一、西道下山より迫之谷と申所迄くぬ木御座候処去冬より当夏迄に七步通伐取申候其外山内所々にて松木雜木伐取申候ヶ様に山林猥りに伐取候得は五六年の内には山林不残伐取可申と奉存候

右躰之事古格之通相心得随分觀音山大切に仕立候様に申聞候得共却て悪口過言申自分之慾は差置私を多慾二候様に世間に申触外聞不宜觀音不繁榮「」修驗之後世も難成甚迷惑仕候畢竟「」毎度觀音山皆々心儘に伐取申候故觀音修復建替等自力に難相成事に御座候依之先年も度々御歎申上候一山中觀音山大切に仕候得は修復造営等も容易可仕と奉存候只今之通御座候得は觀音相立不申候

一、前々より仕来候使僧伴僧人歩当春より一向不仕候右之通御座候故不得止御歎申上候何卒以御慈悲条式之通相守山林伐荒不申且又山役人歩等仕諸事指図請候様に被仰付被下候は難有仕合に奉存候「」被仰上被成下候様に奉希候私御存知之通無「」法「」而不弁に御座候

に付書附差上申候宜御「」候以上

午八月二十二日

九六位山

成就院印

大宝院
観喜院

当山二代成就院量遍遺状之写

一、景通公御代に成御山御奉行佐藤仁右衛門殿広内御山守
清兵衛を以当山御用木御改被成候刻明日白杵へ「」
支配方大脇又右衛門殿成水三四郎殿江其旨申「」九
六位山之事各別之事に候間御改に及間「」上
二、「」左衛門殿御月番にて候間御改申上候様にと被仰
付候「」速久右衛門江申上候得は此方事近年役人にて
上納不存候古元之儀具に申候様にと被申候に付右赦免
之わけ具に申達候得はよこ手をちやちやと御打被成左

程明白場殿様へ御召返被成候儀者有間敷候何も御申被
成御通に此方共ケ様に申旨御奉行に申聞せ改帳取返申
様にと被仰付早速罷帰昨日之御改帳取返し申候事
三、其後茂当山之儀を何角と御申被成候方も御座候得共
「」々わけ改を申何事にても此方一円請付不申候最
早此方も露命今を限に罷成候間末々之為と存「」
有増筆に残置畢

「」十四己巳曆九月吉辰日 法印量遍判当山後住封

甲第七号証

一、私手前不勝手に罷成候時分新地御年貢拾俵之内四俵宛
十年程御免被下候後藤半右衛門殿寺社御奉行之時にて
御座候二年跡午年より右之四俵を御年貢指上申候以上

九六一

明和五戌子極月十八日

成就院判

毛井村御庄屋

六郎右衛門殿

宝永五子年より二年前は

元禄三庚午年なり

天和之此なり

夫より拾年以前延宝年中

天和元酉年より元禄三年拾年に成る

明治二年巳十一月

九六位山

円通寺

御歎申上覚

甲第八号証

一、「」

「」被仰出之御趣意奉恐入候当御免山御竿「」

に付誠に愁眉罷在候山内之儀は別紙書上「」免山之

内開畑にて前代より為冥加御年貢上納仕候得共高山故

秋は大風に損夏は霧深候故「」不憚勝に而銘々困窮

に相暗候且山内竹木者本尊堂飯堂門等為普請修覆被下

置候儀当御沙汰之趣にて者普請造作難相仕解候様に相
成可申と奉存候猶本尊前々より年限相定候御開扉度毎
に修覆を加押移候折柄去る元治子年御開扉年限に付鐘
堂門再建仕諸棟修覆いたし候得共何角拂底に付入用金
借用にて漸々出来候得共於今返済仕兼候故「」山
之竹木植立返済致度存念に御座候得共御沙汰之御趣意
にては甚心痛仕候附ては私寺内「」都合六軒之者
共柱替修覆平日之焚木等に「」以竹木渡世罷過右脇
坊共者觀音掃除致百姓「」以前之処寺付之者に候得
共於當時は御上之百姓にて「」候得共觀音山役人夫
竹木植次根さらへ冬は御免山之外野深野火はけしく
故年々火道切明境焼等右軒敷にて致候得共少人数故每
度焼込候事御座候故山内盛木難成儀に付御沙汰之趣に
ては銘々共に至迄平日之入用竹木ニ迷惑仕候間何卒御
上之以御憐愍先年之通被仰付可被下候段重而奉願上候
「」年巳十一月 円通寺

九六位山円通寺縁記

豊後州海部郡丹生白杵両荘の堺九鹿猪山円通寺は古老伝へ云往古 聖徳太子の御時百済国沙門日羅聖人来朝し 崇峻天皇四年辛亥当国古国府円寿寺を開くの時毎朝日輪を拜せり此時に当り慶雲^五霧^七此峯にかかり揺々曳々霧にあらす煙にあらす春都々粉々五色をなし光彩偏く眼を射る上人謂へらく瑞雲の下には必ず神仙遊化の勝地ありと一日錫を杖き西坂より攀踏す半腹に到れは山勢峨々老樹鬱々危峰崢々巖重疊路正に絶へ容易く登るを得す如何せん^と猶豫不時に奇なる哉九匹の鹿猪を率ひ来り上人の前に至り礼拝し嶺に向ひ走り嶮り即時に路を成す上人其趾を踏み山の頂に踏四方眺望すれば衆峰環列八葉を分ち蓮花の形を表し宛も補陀落山に似て目らこれ天然仏陀の靈地なり上人に告て日 我はこれ此山の地主摩利支天の垂跡なり此山を掌る事已に年不久し補陀台岳の妙境観音遊化の勝地龍神衛護の福所なりこれより未申に当り幽谷に滝あり其下自ら深潭をなす水面円鏡の如く広し三尋半深きこと測るへからす龍王常に茲に住み醍醐の法水を甚へ願に応し四生の早苦を洗ふ又戌亥の嶺高く秀てて衆峰に冠たり是則如意宝珠にして無量の福智を雨とし衆生に施す

誠に殊勝の靈山也上人宜しく此地に円通尊を安置し五々の衆生を濟度せよと言ひ終り忽然と見へす時に香木に薫の転するありこれ嘉非の良材なりと伐り取りこれを以て千手観音の立像を彫刻し長二尺 一字を建てこれを安置し

九鹿猪山円通寺と号す 又将来を慮り銀杏の実を門前に植へ誓願して云う法燈永く龍華の曉に到らば樹年を歴てますます榮へよと則ち法弟俊寛法印に附し此地に住しめ円頓の宗風を崇奉し世々仏燈を掲げ絶ることなし其後建久年中大友能直豊府居城の砌祈願として寺領若干を寄附せらるまた大友貞親公の時に当り八十町四方の貢税を免除し境内八町四方を画し殿堂多宝塔鐘楼山門方大諸堂にいたる迄悉皆再建し並に十二坊を建て一百名の僧徒を住しめ常に仁王大会を講して国家の瑞慶を祈らる加え毎歳正五九月十八日を以て梵帝を饒り祭祀を行ふ殊に正月十七日徹夜鬼走祭会を勤行す此時遠近の人民疫難を消するため此座に参会するもの數万人におよぶ此法に罹らす云ふ時人称して一九鹿猪二靈山三神角これを豊後の三大寺と唱へ当山其一に居れり此山老樹鬱密黒色を帯る故に黒越山と云ふ然して本尊の威光ますます廣大無辺にして巨多の靈驗世に著しく遠近の男女日夜歩

ミを運び貴賤群集現在未來の願望円足せすといふ事なし然といへとも世移時變し大友義統公の時に至り天正十四年丙戌冬十二月薩州鳴津義久の兵当国に乱入し当山も亦陣営となり遂に兵火に罹り堂塔伽藍悉く焼亡荒野となれり唯上人曾て植置玉ひし銀杏の森はかり大樹五六株を存す爾後星霜四十七年を経寛永九壬申予が祖父量海法印大野郡野津院藏園村に住居の時正月十七日の夜夢に紅衣を着たる異相老僧來りて告て云これより北方五里を隔て山あり九鹿猪山と云彼所に銀杏の森あり其中五囲の大樹洞中に觀音の靈像ましますこれは往古百濟国日羅上人の彫み給ふ所なり汝此地に宿縁あれば急き行て再興すへしと正しく靈夢を蒙れり於是多福寺雪窓和尚に依托し曰杵城主稻葉一通公に願ひ奉り其許可を得同年三月十八日九鹿猪山に登り大樹の洞中を見れば奇なるかな靈夢の如く觀音の尊像巖然として存在せり量海歡喜愉快限りなく礼拝恭敬浅からず直ちに榛莽を開拓し志を勵し所縁を募り草堂を営み尊像を安置し奉り側に一院を造建し同十九年壬午正月二一日家族五人を率ひ此地に移住し再び仏焼つ豊土の一隅に可す正に国家鎮護の祈禱災を攘ひ福を招くの靈場なり其後万治三年量海嫡男清雄法印江戸に於て領主

信通公に觀音堂改造を願ひ木材を乞ひ得て四間半の殿堂を造り陶瓦を以て茅件に換へ繕管全く成り大に其觀を改む寛文二年壬寅春三月吉辰上棟の式を行ひ尊像を遷し奉り道場を飾飾し信仰供養す同五年乙巳黒越山内竹木剪伐の免許を蒙れり同八年清雄法印江戸に在り此時牧野飛彈守某公帰依して祈禱場とす公嗣子なし清雄をしてこれを祈らしむ清雄遙に当山の觀音に祈願修法せり程なく奥方懐妊期満ちて男子を誕生せり後に駿河守某公と称して黄金若干を贈り洪鐘を寄附す同年十二月梵鐘成り多福寺賢嚴禪師其名を撰す

古老の言伝ふる所を以てこれを記して永く後世に伝ふるものなり

維時元禄三庚午春三月鬼宿日

九六位山中興二代

量辺誌焉

(二) 天台宗修驗世系譜

鷲宝山長蓮寺

日明村 和光院 ㊦

中興

長泉坊法印有榮

弘治二丙辰歲
六月二十五日寂

從往古斯号在之奥州白川居住仕之処長泉坊淳

雅法印大友氏能直依招在之建久七丙辰歲当国

二引越津久見 二居住仕 淳雅十三世之後有晴

法印為大峰修行応永三十癸卯歲乘船渡海節遇

難風欲没時熊野三山 二祈護擁立所風波靜船中得

菰 有晴随喜シ遙拜之時波間 二小石三ツ浮成

奇異思頂戴之奉崇神体是深田村權現也當時大

サ 尺余顯然有晴四世之孫宥好佐伯惟治皈依之

処 二乱心 二而不意 二手討 二遇無統子二十年余

断絶其後宥好甥三浦孫三郎上京若王子罷出再

興之趣意 有申修験卜成中興仕是長泉坊宥榮也

二世

長泉坊法印有実

天正十五丁亥歲
九月十日寂

三世

長泉坊法印有悅

慶長元丙申歲
五月二日寂

史学論叢

四世

長泉坊法印有清

寛永十七庚辰歲
七月十七日寂

五世

長泉坊法印有正

元禄七甲戌歲
五月二日寂

六世

長泉院法印有源

元文二丁巳歲
十一月七日寂

延宝四年自市場村深田村 二移住又元禄年中一

派支配役被 仰付同十六年奉願跡宥盛 二相統

引越十六天神居享保十六亥七月十八日支配役

蒙御免隱居

七世

長泉院法印有盛

宝曆五乙亥歲
七月二十三日寂

享保九有源宥盛父子 二有兼召連若王子出宥兼

組頭相統下着以後奉願隱居御目見如元又享保

十六亥七月有源跡役被仰付寛保二戌七月願之

通退役

八世

長泉院法印有兼

延享年中支配役被 仰付之処御家法 二付被召

放明和之比 左志生 二引移

九世 和光院法印有將

桂珠院印

左津留村住

開基 大光院法印有慶 寛永十癸酉歲 七月二十一日寂

長泉坊有清美弟也則有清弟子

十六天神住

大宝院印

開基 大宝院法印有源 有前

二世 大光院法印有伝 貞享二丙寅歲 二月二十二日寂

初深田村長蓮寺住元禄年中移住于十六天神享 保十六亥七月十八日支配役蒙御免隱居

御目見被 仰付

二世 蓮法院法印有盛 有前

長蓮寺七世住享保九年大宝院入家内御目見元

三世 貴宝院法印有言 宝永七辛卯歲 七月十六日寂

之通被 仰付享保十六年有源隱居跡支配役被

実光明院有祝嫡男御目見相統之处四拾九歳 而自殺

三世 大宝院法印有庸

寛保二戊七月廿三日有盛隱居有庸入院

四世 宝玉院法印有三 享保十九甲寅歲 九月二十三日寂

有盛二男安永七戌十二月取次役被 仰付

是者壯年ヨリ病身故隱居

四世 宝光院法印有程

有庸二代

五世 貴宝院法印有教 安永三甲午歲 六月十二日寂

宝玉院有三弟有三病身故相統

六世 桂珠院法印有景尚

大光院^印

実府内賀来金剛院弟 御目見

左津留村住

開基 大光院法印有慶 在前

安龍院^印

川登岩崎村住

二世 大光院法印有伝 在前

開基 安龍院法印門啓 正徳四甲午歲 正月四日寂

実三重松谷村産長泉坊有正弟子卜 成正保年中

三世 大光院法印有寛 寛延二己巳歲 八月廿五日寂

川登岩崎村^二 一院奉願居住

大光院有伝実子有伝没後貴宝院家内而在之處

貞享四^卯年御目見叶

貴宝院別院造立元禄二己歲旧宅^二住両院卜成

御目見被 仰付元禄九子十二月廿三日也享保

二世 誠実院法印有梅 享保十四己戌歲 四月五日寂

十巳十二月隱居

元禄七^申十二月十八日門啓隱居有梅入院

四世 大光院法印有泉 宝曆十二壬午歲 七月二十七日寂

三世 安龍院法印門映 明和十癸巳歲 三月廿四日寂

享保十十二月十五日入院

享保十巳十二月十五日有梅隱居門映入院

御目見延享四年隱居

四世 安龍院法印門慶

五世 護国院法印有貞 宝曆十二壬午歲 八月九日寂

実内藤興次兵衛次男

実蓮徳院三男 御目見

明昭二酉二月門映隱居門慶入院

野津芝尾村

六世 大光院宥快

感応院^印

三重市場村住

開基 正覚坊 寛文九己酉歳
九月廿五日寂

長泉坊有清弟子其産不詳

二世 成生院有説 元禄十一戌寅歳
七月二日寂

三世 蓮徳院有信 明和二乙酉歳
十一月二十日寂

享保十年 二從三重野津芝尾村 二移住

四世 林光院法印有盈

宝曆三酉十二月廿三日有信隱居有盈入院明和二酉
正月御目見叶

五世 感応院法印有弁
実者当山方妙法院三男
御目見相統

三重深田村住

観明院 ㊦

開基 光明院有設 元禄七甲戌歳
二月廿七日寂

長泉坊有正弟子

二世 明王院有善 享保十一丙午歳
正月十七日寂

宥設二男

三世 清宝院有浄 明和五戊子歳
正月廿六日寂

四世 観明院有養

四酉十二月入院室

三重深田村住 智光院 ㊦

初世 威宝院法印有謁 安永三甲午歳
九月廿三日寂

明王院有善次男正徳年中ヨリ成別判卜明和七寅
七月隱居

二世 智光院深海

実者川辺村之産養子実父政右衛門明和七寅七
月入院

玉田村住

遍照院印

初世

遍照院宥誓

宝永三丙戌歲
八月廿八日寂

長泉坊有正弟子

明王院印

二世

光明院宥觀

寬延三庚午歲
十月二十日寂

実者光明院宥設三男

宝永三 戌十一月廿三日有誓跡入養子

開基

密護院法印有歛

椎原村産也大宝院宥源弟子

宝永七寅三月椎原村五人組合 二人

椎原村居住

三世

盛勝坊宥進

宥觀次男明和元 隱居

二世

貫行房宥明

三世

權龍房宥迂

四世

遍照院宥桂

明和元申八月院号同二 酉 四月入院

四世

明王院宥晴

実者清宝院宥淨嫡男也

三重川辺村住

修行院印

初世

遍照院宥僧

宝曆十一辛巳歲
三月五日寂

光明院宥觀嫡男享保十八年ヨリ別判奉願川辺

村引越居住

開基

頼芳院宥慶法印

元文二丁巳歲
三月十七日寂

元三重肝煎村産也大宝院宥源弟子正徳六九月

天龍院印

野津利野村住居

利野村五人組合二入

二世 仙寿院宗英法印 安永七戌戌歲十一月朔日寂

元文巳年入院

三世 天龍院探海

実者南岳院円阿弟子

勤覚院印

野津持丸村住

開基 胎藏院有見 正徳四甲午歲六月八日寂

元禄三年十一月二日 元暈屋町産也壯年二而大宝院有源弟子卜成 故出刀坊

所其前南岳坊卜申坊跡二住居仕宝永二西九月院

号

二世 胎藏院宥光

三世 勤覚院林転

福寿院印

野津持丸村居住

開基 福寿院有信 宝曆八戌寅歲九月十一日寂

元持丸村産也初胎藏院有見養子不和故離縁大

宝院有源弟子卜成当所住享保十巳正月廿三日

五人組合二入

二世 宝寿院有延 明和元甲申歲十一月廿日寂

明和西 五月隱居

三世 福寿院法印有転

明和二五月入院

見覚院印

初世 定覚院有翁

海添産也大宝院有源弟子享保二西九月福良村

五人組二入

二世 見覚院宥光

三世 定覚院印有僊

有光二代

解脫院印

新基

宝蔵院有円

正法院嫡子脱以後庄左衛門与成有之処長泉院

弟子卜成再興

三重玉田村住居

初世

寿宝院有悦

明和三丙戌歳
四月十九日寂

岡城下産也俗姓句氏連法院有盛法印弟子

吉野月形村住居

長伝房印

二世

解脫院有定

初世

長伝房玄秀

元月形村産大宝院有庸弟子

上玉田村住

宝蔵院印

南岳院印

初世

大学坊有門

川口坊開基中興

初世

来覚院法印清栄

元豫州ノ人寛永年中比ヨリ住之有智山蓮城寺

玉田村産也新蔵坊法印有嚴弟子

二世

威受院有元

享保十五戌歳
二月廿三日寂

三代住職覚弁者清栄嫡男也

三世

正法院有啓

宝曆六丙子歳
三月十一日寂

二世

乘慧院法印秀伝

延享四丑四月同村成徳院与有趣趣成徳院ヲ致

実村上幸右衛門弟也延宝六年九月三日寂無継

調伏之旨及上達御吟味有之父子三人脱衣被

已ニ為絶蓮城寺覚弁門弟ノ故是ヲ願則清栄末子

九六位山内係史料(一)

同十月十八日ニ乘懸院後繼之儀成就院量刃被

仰付十月廿九日成就院為弟子法体メ改了識

三世

来覚院法印清秀

初了識実者清栄子延宝六年十一月五日入院

享保十六亥十月廿八日隱居

四世

文殊院法印清雄

享保十六亥十月廿日入院明和元申歳法頭役

五世

南岳院法印円阿

親又殊院跡法頭役安永七戌十二月廿三日有故

法頭役被召故御目見格被削為平山伏福良村

五人組合 二人

福良村居住

大寿院 ㊦

初世

大寿院寛翁

享保十五戌十二月四日
寂ヌ

三重羽飛村座来覚院清秀弟子元禄十三辰六月

廿八日来覚院家内ヲ放五人組合 二人

二世

伝道院覚門

宝曆九己卯歳
十二月十六日寂

三世

大寿院顕如

明和二 西 正月十三日御目見叶宅踏卜成

三重市場村永沢山学善寺

中興

新蔵坊法印心慶

応永廿八辛丑歳
二月六日寂

先祖新蔵坊法印宥賢奥州膽沢郡之者也大友家ヲ
慕建久年中ニ当国ニ来処祈願所ヲ建ラレ鎮守熊

野権現也正東山若王子直末下也世々銘々名不相
知応永年中中興心慶ヨリ牌名相知レ申

二世

新蔵坊法印権讚

寛正二辛巳歳
六月五日寂

三世

新蔵坊法印仲将

明応三甲寅歳
十月三日寂

四世

新蔵坊法印利正

享禄四辛卯歳
七月七日寂

五世 新藏坊法印泉光 永祿三庚申歲 五月五日寂

寬保四子正月十八日隱居

六世 新藏坊法印仙僧 天正七己卯歲 三月二日寂

十四世 新藏坊法印有海 安永七戊戌歲 十一月十三日寂

実者蓮法院有盛三男也

七世 新藏坊法印有観 慶長十七戊子歲 五月廿一日寂

寬保四子正月十八日入院

八世 新藏坊法印有仙 寬永八辛未歲 正月十五日寂

十五世 新藏院法印有親

安永七戊十一月廿八日入院 初名法曼院

九世 新藏坊法印有心 寬永廿一甲申歲 八月廿八日寂

大德院 印

十世 新藏坊法印有藏 寬文乙巳歲 三月廿八日寂

開基 大德院有海 正徳二壬辰歲 四月廿六日寂

三重上赤嶺村居住

十一世 新藏坊法印有栄 元祿九丙子歲 八月七日寂

上赤嶺産新藏坊有藏弟子 寬文年中ヨリ当所住ス

十二世 新藏坊法印有玩 元文二丁巳歲 三月十八日寂

二世 大德院明海 宝曆五乙亥歲 十二月廿八日寂

元祿十巳十月入院寬保四子二月隱居

十三世 新藏坊法印有盛 寬延四辛未歲 六月七日寂

三世 太德院称海

実者法印有栄二男有玩弟也

寬保四子二月入院

妙覚院印

小坂村居住

初世 妙覚院定海

大徳院明海二男宝暦二年申六月年中別判

三世

真修院量覚

享保二丁酉歳
五月晦日寂

二壬寅三月建立畢同五乙巳歳蒙山中竹木御免
延宝二甲寅歳八月支配役被 仰付

宝永六己丑歳観音堂覆材木拝領

賢徳院印

九六位山円通寺中興

初世 成就院法印量海

慶安三庚寅歳
六月廿五日寂

四世

大学院量盛

享保六辛丑歳
閏七月二日寂

五世

成就院法印玄海

宝暦十庚辰歳
十一月廿一日寂

享保十三戊申歳本堂修覆材木拝領

六世

成就院玄慶

安永二年観音堂建替二付材木拝領仕同五申歳
無調法訳在之 依御家法退住被仰付引込罷在

御領主様令量海九六位再興寛永十九壬午正月
移住

七世

賢徳院法印玄専

文化八辛未歳
八月十一日寂

二世

成就院法印量辺

正徳元辛卯歳
八月廿八日寂

八世

成就院萬慶

安政四巳年
正月廿六日寂

萬治三庚子歳観音堂建替二付材木拝領仕寛文

九世 真殊院仙慶 明治二十八年旧五月四日寂 七十三

津倉蘭村 二引越寿林坊子平治寛永十九壬午歳
量海法印 二付登山仕其後量刃法印弟子 卜成中
城 卜変名仕

普門院 卍

九六位山住居

初世 宝城院量秀 享保十七壬子歳 八月廿一日寂

二世 円実院浄尊 寛保三癸亥歳 八月十九日寂

成就院量刃長子始岩船山八幡酒掃人 卜成引越居

正徳五年成別判

住之処不埒之儀有之御追放被 仰付三十年余流

浪仕処及老年 二及絶命故奉願帰山正徳五未歳別

三世 蓮乘院浄海

判仕

四世 密王院浄山

二世 宝城院秀海 安永六年隠居

浄海二代

安永六年隠居

新応院 卍

三世 普門院秀盛

九六位山住居

初世 覚性坊量円 元文二丁巳歳 十一月十二日寂

蓮乘院 卍

九六位山住居

初世 中城坊浄辺 元禄十六癸未歳 六月四日寂

覚性坊祖父鳴津嘉門慶長年中從美濃国白杵下
向而宮河内村引越居住嘉門孫金三郎延宝年中
登山仕量刃弟子 二成正徳五乙未歳成別判 卜

中城父寿林坊寛永九壬申十二月十八日於野津

「」先祖大野郡佐草村 ヨリ成就院先祖 二付野

二世 来宝院円海

安永八亥歲隱居

三世 新応院円亮

覚順坊

久所村延命寺住居

初世

円快坊探海

明和六己丑歲
十二月五日寂

元円快父迄ハ俗人ニ而薬師酒掃人也享保十九年ヨリ成就院玄海弟子ト成

二世

覚順坊寛海

泉龍院(印)

横尾邑船山八幡宮酒婦人中興

初世

泉龍院日清

享保二丁酉歲
四月九日寂

実者新蔵坊有心孫明寿院秀存養子ト成不和故

当所来住不定之処宝城院量秀義貞享四年五月

逐電依空坊也故元禄二巳年無住ニ付日清入院

被仰付大善院床相改若王子床ト成

元禄十七申十二月十八日隱居

二世

願成院法印秀顯

元禄十七甲十二月入院享保十四酉十二月八日隱居

三世

利益院法印秀叟

寛延之此目陰居 (曆七丑十二月隱居)

四世

泉龍院法印祐顯

宝曆七丑十二月入院

智見院(印)

横尾村居住

初世

龍性院祐心

寛延三庚午歲
四月十二日寂

横尾村泉龍院日清弟子大善院床相統元禄十五年三月泉龍院家内ヲ離別判ニ成

二世

大祥院「」清

三世

智見院祐海

明寿院(印)

家野村住居

初世

明寿院秀存

寛文九己酉歳
十一月十七日寂

享保九辰六月十五日風難有之本山修験十五人祈
禱有之三日三夜相勤此時修験絶

二世

仙性院秀盛

宝永三丙戌歳
十月二十七日寂

六月十五日
享保九初此風難ノ災遇本山方一派数

(以下なし)